

# 意味役割理論から見た名詞の種別と隠喩的使用との関係

中本 敬子\*

金丸 敏幸†

黒田 航‡

## 1 はじめに

フレーム意味論およびフレームネット [5, 6, 7, 8, 9, 10, 11] を拡張したフレーム指向概念分析 (Frame-Oriented Concept Analysis of Language: FOCAL) は、具体名詞には、少なくとも役割名と対象名の区分があると論じている [32, 18]。それぞれの簡単な定義は下記の通りである。

**対象名** 同種の内的属性を持つ対象の集合を指示する名詞。  
例えば、「柴犬」は短毛・小さな立ち耳・巻尾などの対象そのものが持つ内在的特徴によって特徴づけられる集合を指す。

**役割名** 状況相対的に定義される役割を指す名詞。例えば、「番犬」は〈〈家〉の〈番〉をする〉役割を持つ犬に言及する名詞である。逆に言えば、そのような役割を担っていれば、どのような犬であろうと「番犬」と呼ばれる。多くの役割は、特定の状況での機能と結びついている。

類似の分類は、実体カテゴリー (entity categories) と関係 (役割) カテゴリー (relational (role) categories) の区別 [1, 13, 19] という形で認知心理学の分野でも独立に提案されており状況概念を基盤としたモノ概念および名詞が重要視されて来ていることが分かる。実際には、すべての具体名詞について、役割名なのか対象名なのかを判別することは難しい。特に、道具的な人工物に与えられた名前 (例えば「時計」) については、そのような役割を満たせるモノの集合が同時にある特定の内的属性を持っているため、役割を指すとも対象を指すとも言い難い場合がある。その反面、明らかに役割名、あるいは役割名と認定可能な名詞もある。本論文では、主として、このように明白に役割名、対象名のいずれかに分類可能な名詞の振る舞いの一端として、語の隠喩的使用のされやすさを検討する。

## 2 役割名と対象名の特徴

先に述べたとおり、対象名は特定のモノ (物, 者) の集合を指す名詞であり、役割名はある状況での役割を満たすモノの集合を指す名詞である。ここから、それぞれの名詞には次のような特徴があると考えられる。

まず、その定義から考えて、対象名が指すモノのカテゴリーは共通の物理的・知覚的属性を持っているのに対し、役割名が表すモノの集合はそうではないという点が挙げられる。つまり、対象名が表すカテゴリーでは、知覚的・物理的属性によって定義されるような直観的な類似性がある程度高いのに対し、

役割名が表すカテゴリーではそのような類似性は低いと考えられる。更に、対象名のカテゴリーは、他の対象名のカテゴリーと対比したときに、両方に共通する属性と共通でない属性の抽出が比較的容易なのに対し、役割名カテゴリーではそのような共通属性と相違属性の特定は簡単ではないだろう。

次に、名付けるべきモノに対して、それに固有の名詞が存在するかどうかという被覆率が対象名と役割名で異なる可能性がある。役割名は、状況相対的に定義される役割であることから、人が弁別的に概念化している状況 (あるいは、自然な状態での概念化のレベルとして基本レベル・カテゴリーに相当するような基本レベル状況) に応じて、役割も概念化されていると考えられる [18]。しかし、実際には、そのような役割の数だけ名詞が存在するわけではない。黒田ほか [18] は、ある意味フレームに特有の役割が、それ固有の名称を持たない場合、類似した意味フレームの役割名を借りたり (e.g., 〈強盗〉の〈被強盗者 (=被害者)〉を〈獲物 (=被捕食動物)〉と呼ぶ)、その役割を満たす事例のうち代表的な事物の名前を借りたりする (e.g., 〈他者からの金銭の引き出し〉で〈引き出される側のヒト〉を「銀行」と呼ぶ) ことで、名前を与えるとしている。

### 2.1 名詞の種別と比喩的使用

役割名、対象名が持つ上記のような特徴から、語の比喩的使用について、以下のような予測ができる。

まず、語の隠喩的な使用、つまり、「～ような」「～みたいな」といった比喩指標を含まない比喩的用法は、対象名一般に比べ、役割名、ならびに特定の役割に対して強い代表性をもつ対象名 (e.g., 「イルカ」は対象名であるが〈水族館の人気者〉という役割に対し非常に強い代表性をもつ) で多く見られるはずである。なぜなら、このような借用は喩えられる側と喩える側の間に一種の同一性、もしくは包含関係を認めることに相当するため、類似点と相違点の双方を意識した上で使用される直喩には用いられにくいと考えられるからである。また、同一の役割名について、隠喩的使用と直喩的使用の相対頻度を比較した場合にも、このような同一視の起こり易さにより、隠喩的使用の方が多く見られると予測される。

役割名・対象名の区別と隠喩形式の選好の関係は、[30] で示されている。彼女らは、「A はまさに B だった」(隠喩)、「A はまるで B のようだった」(直喩) という二つの名詞で構成される単純な比喩を用い、B が役割名の場合には、対象名の場合に比べ、前者の形式を好む度合いが強まることを示した。しかし、この研究には明らかな限界もある。実際の比喩使用を見てみると、喩えられる側の語は明示されずに使われる場合が多くある。例えば、「様々な問題に照明を当てる」では、喩える語である照明が何を喩えているのかは文中には現れていない。このことを考えると、実験で比較した二つの文型は、十分に自

\* 文教大学

† 京都大学/情報通信研究機構

‡ 情報通信研究機構

然とは言い難い。この難点を克服するため、本研究では実際の使用例を解析することにした。具体的には、(1)にあるの16対32語の名詞の使用例をKWICによりコーパス全抽出し、それらが比喩として使われているか否かを後述の基準でコード化し、相関を見た。また、一部の名詞については、単に各事例が隠喩あるいは直喩的使用であるかどうかを判定するだけでなく、より詳細な検討を行った。

- (1) 1\*. 番犬/柴犬, 2. 横糸/絹糸, 3. 照明/月光, 4. 害虫/カメムシ, 5\*. 抜け穴/洞窟, 6\*. 伝書鳩/山鳩, 7. フィルター/ポリエステル, 8. 墓場/北極, 9. 敷石/隕石, 10. 型紙/和紙, 11. 名馬/白馬, 12. 街路樹/広葉樹, 13. 合図/ハイフン, 14. 観葉植物/高山植物, 15\*. 種牛/雄牛, 16\*. 野良猫/シャム猫。

このコーパス事例解析から次のことが明らかになった:

- (2) 従来の認知言語学の比喩の理論(例えば、概念メタファー理論(Conceptual Metaphor Theory: CMT) [14, 20, 23, 24] や概念ブレンド理論(Conceptual Blending Theory: CBT) [3, 4] では、次の二点に関して十分な考察がなされていないとは言えない状態で、現実の比喩的使用を捉えるには不十分である:<sup>1</sup>(i) 比喩の用法をいかに認定するか、(ii) 隠喩と直喩の関係をどう捉えるか

何が問題であるかは §4.5 の議論に譲って、以下ではまず §3、コーパス調査の量的分析として、役割名と対象名とが黒田ら [18] の予測通りに比喩的使用に差を示すかどうかを検討する。これに続いて、§4 で質的分析としてコーパス事例と作例を挙げながら、比喩の認定基準の検討を中心に、今後の比喩研究が取り組むべき課題について考察する。§5 で結論を述べる。

### 3 コーパス調査 (1): 量的分析

#### 3.1 事例の収集

中本ほか [30] で検討された役割名-対象名の対16対32語を含む文をKWIC検索を利用して、テキスト・コーパス(金丸 [35]) から収集した。これらの対は、役割・機能性を判定する共起テスト(「このYはXに向いている/向いていない」など)に対する複数人の容認性評価に基づいて選出されている。収集された事例から、(1) ターゲット名詞が辞書、シソーラスの見出し語となっているもの、(2) 固有名詞の一部になっているもの、(3) 重複する用例、(4) サ変動詞の語幹となっているもの、(5) KWIC ツールで収集した前後文脈では決定が難しいものを除き、分析に使用した。

#### 3.2 コード化

次の項目について、主として第一筆者によるコード化を行った。(1) 隠喩的使用: 比喩指標(後述)を伴わない比喩として使われているか、(2) 直喩的使用: 比喩指標を伴う比喩として使われているか、をおおの1.0(明らかにそう)、0.5(そうかも知れない)、0(明らかにそうではない)の三段階で評定した。直喩が隠喩が判断に迷う例(e.g., 「[Y: 絹糸] 状の [X: 光沢]」)については、名詞Yが潜在的に「対象Xは意味タイプYに属する」という判断を表わしていると考えたとき、「XはYではない」(e.g., 「Xは絹糸ではない」)という含意を、メトニミー

的補正([絹糸] 状 [絹糸の色] 状)を想定して読み取れるものを直喩とし、そのような含意を読み取れないものを隠喩とした。また、一部のコーディングについては第三著者による確認と訂正が行われた。

考察で詳しく述べるが、ある語の用法が隠喩か字義通りか、直喩といえるかどうかを判定するための一般的な原則をあらかじめ想定することは困難であり、基本的にコーディングは「多くの人が見て、間違いなく隠喩、あるいは直喩と判断するであろう」という保守的なレベルで行われている。コーディングの経過から、判定の困難さはおおむね次のような原因による:(i) 比喩性に程度がある(ii) 比喩性、修辞性を感じさせる用法は、直喩・隠喩以外にもたくさんあるため、それらとの区別が難しい(iii) 比喩として成立している単位が語とは限らず、言語表現が複層的に意味を符号化していると考えなければうまく扱えない例が多数ある。これらの点については、次節4で詳しく述べる。

#### 3.3 量的分析の結果と考察

##### 3.3.1 コーディングの例

次に隠喩、直喩などがどのようにコーディングされたかについて「番犬」を例に説明する。まず(3)は隠喩の例である:

- (3) 日本は世界文化に対して西方の覇道の番犬となるか、はたまた、東方王道の干城となると欲するか。

この例では、「番犬」は自然分類の観点では〈番犬〉ではない(それ以前に[犬]ですらない)「日本」というものについて述べるために使われている。また、「番犬」が比喩として使われていることを示唆する言語表現(「ような」や「みたいな」など)になっていない。したがって、この文における「番犬」は「根拠」を伴わない「隠喩」と見なせる。これに対し、次の(4)の例は、比喩指標「のような」を伴う直喩の例である:

- (4) 由来は使う人のマシンの番犬のような役割を持つソフト、ということからです。

この例では、「番犬」は「ソフト」の役割を喩えるために使用されており、なおかつ、それが比喩であることを示す語彙「のような」を伴っており、直喩と見なしうる。

##### 3.3.2 名詞の種別と隠喩・直喩的使用頻度の関係

表1に隠喩、直喩的な使用の比率を示す。この表からは以下のような傾向が読みとれる:

- (5) a. 隠喩使用の相対頻度は役割名の方が対象名より高い。  
b. 対象名が比喩的に使われる時には直喩のことが多い。  
c. 一部の語(e.g., 「フィルター」「合図」)は他の語(e.g., 「和紙」「北極」)に比べ、直喩であろうと隠喩であろうと比喩的に使われるポテンシャルが高い。

役割名の中で、直喩用法の出現率が隠喩用法を上回ったのは「敷石」のみである。「敷石」の直喩用法はすべて、サメなどの歯や骨等の並び方を喩えるのに使用される「敷石状」という表現であり、「～状」を直喩指標を見なさなければ、この例でも役割名で隠喩用法の出現率が上回っていることになる<sup>2</sup>。それ以外の役割名では、隠喩・直喩共に用例0か、隠喩の例が直喩

表1 名詞ごとの隠喩および直喩の使用の頻度と比率

	役割名			対象名				
	事例数	隠喩 (%)	直喩 (%)	事例数	隠喩 (%)	直喩 (%)		
両事例とも100以上								
繊維	フィルター	672	41 (6.1)	1 (0.1)	ポリエステル	343	0 (0.0)	0 (0.0) *
虫	害虫	1751	4 (0.2)	1 (0.1)	カメムシ	317	0 (0.0)	0 (0.0) *
明かり	照明	1801	41 (2.3)	1 (0.1)	月光	218	1 (0.5)	2 (0.9)
樹木	街路樹	248	0 (0.0)	0 (0.0)	広葉樹	786	0 (0.0)	3 (0.4)
植物	観葉植物	248	0 (0.0)	0 (0.0)	高山植物	292	0 (0.0)	0 (0.0)
紙	型紙	221	0 (0.0)	0 (0.0)	和紙	859	0 (0.0)	0 (0.0) *
場所	墓場	189	36 (19.0)	7 (3.7)	北極	1598	0 (0.0)	0 (0.0) *
石	敷石	182	1 (0.5)	26 (14.3)	隕石	568	0 (0.0)	1 (0.2) *
糸	横糸	115	11 (9.6)	0 (0.0)	絹糸	488	0 (0.0)	51 (10.5)
馬	名馬	128	8 (6.3)	1 (0.8)	白馬	216	0 (0.0)	0 (0.0) *
いずれかの事例が100以下								
記号	合図	666	6 (0.9)	0 (0.0)	ハイフン	15	0 (0.0)	0 (0.0) *
穴	抜け穴	23	13 (56.5)	0 (0.0)	洞窟	1305	0 (0.0)	9 (0.7)
牛	種牛	53	0 (0.0)	0 (0.0)	雄牛	125	0 (0.0)	2 (1.6)
犬	番犬	70	7 (10.0)	4 (5.7)	柴犬	31	0 (0.0)	1 (3.2) *
鳩	伝書鳩	31	2 (6.5)	2 (6.5)	山鳩	31	0 (0.0)	0 (0.0)
猫	野良猫	19	0 (0.0)	0 (0.0)	シャム猫	1	0 (0.0)	1 (100.0) *

\*: 第1, 第3著者の2名によって独立にコーディングを行い統合したもの。無印は第1著者のみのコーディング。

の例よりも多い場合がほとんどである。これは同じ比喩的な用法でも役割名では直喩の使用より隠喩の使用を生じやすいという仮説に沿った結果である。

それに対して対象名に関しては、そもそも隠喩・直喩の双方の使用頻度が低い。また、比喩的に使われている場合には、「～ような」「～みたい」「～的」のような比喩指標を伴う場合がほとんどである。この結果もまた仮説と一致するものであり、対象名が物理的・知覚的の属性によって定義されたカテゴリーを指すため、他のカテゴリーとの相違点を意識させやすいことに起因すると考えられる。

以上のように、量的な調査の結果はおおむね意味役割理論に基づく具体名詞の種別からの予測と合致しており、このような区別を置くことの妥当性を示すと言える。しかし、各名詞の比喩的使用の細かな実態を論じるには、量的調査で行ったような単純な隠喩・直喩の判定法では十分ではない。次節では、名詞の比喩的使用の実態と隠喩と直喩の関係について、質的分析として、名詞の種別との関係にこだわらずに論じていく。

## 4 コーパス調査 (2): 質的分析

### 4.1 比喩性の認定基準

今回のコーパス調査では、比喩的な用法が使用される頻度について、対象名と役割名の間で違いがあるかを調べるため、明確に直喩または隠喩と判断可能な例のみを取り扱った。しかし、実際には、明らかに直喩、明らかに隠喩といった簡単な例だけではなく、隠喩、あるいは直喩らしさはあるが判定の難しい例も少なくない。例えば、次のような例がそうである:

- (6) a. それが入力バックされて来ずに、一緒に墓場に行ってしまうということが非常に多かったので…。  
 b. まるで自分のねぐらにでも急ぐように、墓場に向かって行進をつづけている。その、やつらのねらう小っぱけな土地は、[...]  
 c. 千里も走る名馬はつねにいるものだが、それを見わけ

る人はつねにいるとはかぎらない。

- d. 重量感を持った風だった。その突風の一撃を合図に、山の相貌は変わった。

これは単純に判断基準が確立していないからというよりは、直喩性、隠喩性の双方が程度を持つためと考えた方が妥当であろう。言い換えると、直喩、隠喩の使用実態を正しく調査するためには、次の(7)にある二つの値を与える評価関数が不可欠ということである:

- (7) 文章中の任意の表現  $E$  について、  
 a.  $E$  の隠喩性の程度 (標準化して 0 から 1.0 まで)  
 b.  $E$  の直喩性の程度 (標準化して 0 から 1.0 まで)

これは §4.5 で述べるように、CMT [14, 15, 20, 21, 22, 23, 24] でも CBT [3, 4] でも与えられていない。それだけでなく、これが比喩の理論が実証的に答えを出すよう取り組む必要のある経験的問題として認識すらされていないようにも思われる。

とはいえ、残念ながら本研究も(7)で問題にしている評価関数の実態を明らかにするには至っておらず、単にこれらを連続的に評価する必要があることを指摘し、その条件を検討することしかできない。以下では、コーパス中の事例と作例を挙げつつ、直喩・隠喩の認定基準について論じていくこととする。

### 4.2 字義通りの意味の定義と比喩的用法

上述の通り、役割名と対象名では字義通りの意味の定義のされ方が異なる。このことは、比喩的用法の生じやすさに違いをもたらすだけでなく、ある用例が比喩かどうかを認定するときの判断にも影響を及ぼす。以下でこの点について論じる。

#### 4.2.1 「番犬」と「柴犬」

「番犬」では隠喩・直喩の両方の用例が見られるのに対し、「柴犬」では類似性に言及した直喩的使用が1例認められたのみである。それぞれの例を次に挙げる。

- (8) a. 時代の声を吠えるんだ。おれたちは番犬じゃねえ。

- b. 見知らぬ人がくると鳴き立てるので 番犬がわりに使っているところもある。

(9) 百三は柴犬に似た顔つきで、にこりと笑う<sup>3</sup>。

「番犬」は〈主を守るために外敵に脅しを加えつつ主に危険を知らせるモノ〉という意味に転じて使用されている。それに対し、「柴犬」の例では、外見の類似が言及されている。

後述の場合と比較して、隠喩と直喩の用法の区別には特に困難は伴わなかった。

#### 4.2.2 「墓場」と「北極」

「北極」の頻度は「墓場」の頻度の3倍以上あったが、直喩、隠喩共に例が0だった。「墓場」の喩の例を(10)に挙げる:

- (10) a. いや、象の墓場という表現はよくないですな。  
b. まさか、結婚は墓場だなんて、あんな無意味な泣言をぼくが引き合いに出すのじゃないことは[...]  
c. 私たちは国境の手前にある「戦車の墓場」に向かっていった。  
d. アリューシャン低気圧は、極東を通過する低気圧の墓場で、それが平均状態で低圧域となっている。  
e. 同会議はしばしば 軍縮会議の墓場 といわれた。

「墓場」は〈人の死者が葬られる場所〉から〈人の死に場所〉という意味に転じている。それはまた〈人以外の生物の死に場所〉という意味に転じ、更に〈生物の死骸が放置されている場所〉に転じ、〈非生物(主に人工物だが、自然物もある)の残骸が放置されている場所〉に転じている。

後述の場合と比較すると隠喩と直喩の区別に困難は少なかったが、「柴犬」や「番犬」の場合と同じ程度に簡単だったわけではない。

このような語義の拡張のパターンは単にメタファーリンクやメトニミーリンクを使って説明されることが多いが、明らかに〈xが、yを、zに、葬る〉という状況を構成する意味役割zの名称(であるか代表例)だった墓場の意味が、x、yを構成する素性の中和によって変容したものだと思なした方が効果的な記述を提供する。

#### 4.2.3 「フィルター」と「ポリエステル」

「フィルター」と「ポリエステル」は同程度の頻度の語(672度対343度)であるが、両者には明白な違いがある。「ポリエステル」には広義の隠喩、狭義の隠喩共にゼロである。直喩用法もなかった<sup>4</sup>。これに対し、「フィルター」は彩のある用法が多い。その中には明らかに隠喩だとわかる用例がある一方、隠喩なのか字義通りなのか判別しづらい用例も多い。以上のような曖昧性が生じる原因は「フィルター」が機能・役割名詞で、「ポリエステル」が対象名詞だという点に求められる。

「ポリエステル」には直喩、隠喩共に例が0だったので問題にならなかったが、「フィルター」には文彩のある、判断に迷う例が多かった。そこで、隠喩性の判定基準を以下のように想定した。

「フィルター」の意味はもっとも広く考えると、(11)である:

- (11) 〈必要なものを不必要なものから選別する〉ための装置、あるいは機能

だが、これでは多かれ少なかれ修辭性 $\approx$ 隠喩性が感じられる多くの例が字義通りに分類されてしまうことがわかった。このため、認定条件を厳しくし、次のように考えた:

- (12) 実体性の基準: Xが字義通りフィルターなのは、Xが物理的実体をもつ装置を指示する場合に限る

(12)の実体性の基準で次の場合が区別できる:

- (13) a. 物理的実体と選別機能が表裏一体なものとしてのフィルター [字義通り 1]: e.g., コーヒーフィルター, UV フィルター, ND フィルター, 空気フィルター, ディスプレイ用フィルター  
b. 物理的実体と選別機能が分離可能なものとしてのフィルター [字義通り 2]: e.g., 高音域フィルター, 低音域フィルター, ローパスフィルター, ハイパスフィルター  
c. 特定の物理的実体のない、純粹の選別機能の実装としてのフィルター [拡張義]: e.g., ノイズフィルター, 最適フィルター, カルマン・フィルター, ベイジアン・フィルター, 格フィルター, メールフィルター, エクセルのフィルター  
d. 選別機能をもつことから、本来ならフィルターとは見なされないものがフィルターと呼ばれている場合: e.g., 人格というフィルター, 身体というフィルター

なお、(13a)と(13b)、(13b)と(13c)、(13c)と(13d)の境界は連続的であり、しばしば曖昧である。他のものから比較的ハッキリ区別できたのは(13a)と(13d)であり、§3ではこの基準を満たすもののみを隠喩として勘定している。(13b)と(13c)の区別は特に微妙である。例えば(13b)と(13c)にまたがる「ローパスフィルター」などはどうやって実現されているかによって(13b)にも(13c)にもなる。定義にもよるが、20%強が、字義通りと見なせる(13a)と(13b)からズレた意味で使われていた。そのうち(13d)の意味で隠喩だったのは7%弱だった。

本来の意味からのズレが感じられるということ領域間写像の十分条件と見なすのであれば、(13c)と(13d)はいずれも隠喩である。だが、そうなると、(13c)と(13d)が区別できず、用法の違いが表せない。このように字義通りではないが、(13d)のように明白に隠喩というわけでもないという例を取り扱っていくには、一般に「隠喩」あるいは「文彩」と言われるような通常とは異なって使用されている語句が、正確にどのような意味で「ズレ」で使用されているのかを整理していく必要がある。以下では、事例を挙げながら、この「ズレ」について考えていく。

#### 4.3 隠喩とは言えない拡張用法

文彩性を感じる用法は、隠喩に限られない。広い意味で、メタファー、すなわち喩あるいは隠喩と呼ばれる用法には、幾つかの異なるものが混在しているようと考えられる。これを十把一絡げに隠喩、ないしはメタファーと呼ぶのは、§4.3.4で後述する理由で適切な用語法とは言えない。

#### 4.3.1 「敷石」と「隕石」

ある語の使われ方の文彩性の判断を困難にするのは、文字通りの意味からのズレの段階性だけではない。例えば、(14)では「敷石」は文字通りの意味で使われているはずなのだが、どうもそうでないように感じられる:

- (14) この床を見おろしたって、彼女の顔かたちが敷石のなかに現われているのを見ずにはいられないのだ!

(14)の例は文字通りの意味で使われている表現に、生起文脈から要求される意味が被さっている例である。この例では他の隠喩とは違って、文字通りの意味は消失していない。このような例がどれほどの頻度で現れるかはわからないが、概念比喩写像理論 [14, 20, 21, 23, 24] にとっては問題となる例である<sup>5</sup>。

同様に、例(15)では、「敷石」は文字通りの意味で使われているはずなのだが、どうもそうでないように感じられる:

- (15) 一人は敷石に使われた黄金だ、もう一人は銀の代用にするためにみがきをかけられた錫だ。

これは Lakoff [21] の Generic is Specific の隠喩を想定すれば説明できるものだろうか?

これらを見て、次のように考えるのは無意味ではないだろう:

- (16) 表現内で何か (e.g., 敷石) が本来の機能  $F$  とは別の機能  $F^*$  ((キャンパスとしての敷石)) をもったり、機能  $F$  が非常にありそうにない実現値をもつ場合 (e.g., 黄金を敷石に使う) に、逸脱を感じ、それを隠喩と勘違いする。

このような別機能の実現による文彩性については、厳密な意味での隠喩とは別ものとして扱うことが望ましいだろう。

#### 4.3.2 隠喩の成立単位

更に、(15)の例では、文彩の成立単位の問題もかかわる。(15)の「敷石」が文字通りの意味と言えるのは、「敷石に使われた黄金」という句の単位では、文字通り「道路・庭などに敷き並べた平らな石」を指すと考えられるからである。その反面、「敷石に使われた黄金」全体は「他者あるいは組織を支えるためだけに使われた特別な能力を持つ人」を喩える表現になっている。この例に示されるように、文彩の成立単位は多層的である。他の例として、実際のコーパスに現れる次のような例を検討してみよう。

- (17) 名馬が年老いて馬小屋に空しく寝ていることから、有能な人が不遇のまま年齢を重ねることの喩え。  
(18) これに反するすべての仮説は、太陽のまへの月光にすぎないという事実です。  
(19) 懐疑的な人間を収容所に送り込んで「害虫を駆除した」気分になれるタイプの人々である  
(20) イデオロギ的・人種的・社会的理由から「国民の害虫」とされたあらゆる人々 [...] の排除

上記の例(17)、(18)では、当該の語はそれぞれ「名馬が年老いて馬小屋に空しく寝ている」「太陽のまへの月光にすぎない」という句の単位の中では字義通りの意味を持っていると考えられる。しかし、表現全体を見たときには事情は異なる。

これらの句はそれぞれ「有能な人が不遇のまま年齢を重ねる」「これ(=観察された事実など)の前では、それに反する仮説は威力がない」といったことを喩えるベース表現として機能している。更に、問題になるのは、これらの表現では「名馬」が「有能な人」を、「月光」が「仮説」をといったように、語単位でみても文彩の成立が読みとれることである。

このような文彩の多層性は、(20)の「(国民の)害虫」と比較すれば明らかのように、(19)の「害虫を駆除する」のような比較的定型的な比喩表現にも認められる。

このような多層性の特性は、次のような例を比較してみればより明らかになる:

- (21) 不合格の知らせを「サクラチル」の電報で知った。

(21)では「サクラチル」は〈不合格〉を知らせる電報の電文であり、その意味で不合格と「サクラチル」の関係は換喩だが、それと同時にこの電文には隠喩が関与している。ただ、〈不合格〉を喩える表現であることは分かるが、(17)、(18)に比べ、喩えを構成する語である「サクラ」「チル」がそれぞれ「入学試験に合格しなかった」というターゲットの何を表しているかは判然とししないのではないだろうか? 強いて言えば、「 $x$ が $y$ に(花と)散る」⇒「 $x$ の $y$ での努力が失敗に終わる」とでもなるうが、これは後知恵でないという保証はどこにもない。

比喩の成立単位の多層性を認めると、(24b)の定義に含めた隠喩と換喩の排他性は成立しないかも知れない。ただ、(25)の例で句全体が隠喩で、「弘法」が〈達人〉、「筆」が一般的に〈使う道具〉を表す換喩になるのを見ると、元領域内部での完結する換喩は先領域をもつ隠喩とは独立すると考えていいのではないかとと思われる。

#### 4.3.3 比喩性と文彩性の区別

上述のとおり、何らかの文彩性が認められる表現であっても、その内実はさまざまに異なると考えられる。これらの表現は、広い意味ではすべて「比喩」あるいは「隠喩」と呼ばれるが、分析結果を踏まえると、寛容すぎる命名と言えるだろう。

CMTが隠喩と呼ぶのは、前述の24b)の広義の比喩であり、これは実は(29)に規定する意味で「比喩」という語の適切とは言えない拡張だという点には注意が必要である。実際、これが理由で、CMT内部での比喩あるいは隠喩の議論—特に比喩と非比喩、あるいは隠喩と非隠喩との区別—は非常に混乱している。CMTがズレの原因を比喩とするのであれば、それはズレの起こる原因と結果の混同である可能性が高い。ズレが感知された時にどう対処するか(聞き手の問題)という問題とズレがどうして生じるのか(話し手の問題)は別の問題である。重要なのは、(22)である:

- (22) 語が本来の意味からのズレをもって使われていることは、狭義の隠喩の十分条件ではない

本来の意味からのズレが感じられるということを領域間写像の十分条件と見なすのであれば、(13c)と(13d)はいずれも隠喩である。だが、そうなると、(13c)と(13d)が区別できない。また、(14)と(15)の違いを表現できないし、(17)、(18)のような文彩の多層性を表すこともできない。

このことから、広義の比喩あるいは隠喩と狭義の隠喩を区別する必要が生じる:

(23) 文彩性の認定

- a. ある語句  $w$  の用例  $u$  に、 $w$  の本来の意味  $m^*$  からのズレ  $\Delta m = m^* - m(u)$  が感じられる時、「 $u$  に ( $\Delta m$  という) 修辞性がある」あるいは「 $u$  は ( $\Delta m$  という) 文彩 (figure of speech) を伴う」と言う。
- b. ただし、 $m^*$  は一つとは限らないとする<sup>6</sup>。

この定義の下での隠喩の定義は以下の通り:

- (24) a. 問題の文彩が局所的な意味型の変更 [25] として解消可能であるならば、それは換喩である。
- b. 問題の文彩が換喩に帰着でないならば、それは広義の隠喩である。
- c. 語  $w$  が狭義の隠喩であるのは、 $w$  を含む表現全体に意味のズレがあり、それと同時に  $w$  の語彙的意味に抽象化が伴っている場合に限る [語彙的意味の抽象化の条件]

(24b) の実例のうち、(24c) で条件を満足するものは一部ではない。例えば (25) は (24b) の意味では隠喩だが、(24c) の意味では隠喩ではない。<sup>7</sup>

(25) 弘法も筆の誤り

「弘法 (大師)」は〈技巧  $y$  に巧みな人  $x$ 〉という潜伏性の意味役割  $R$  の ( $y$  が「書道」の場合の) 代表例であるが、 $R$  は「弘法 (大師)」の意味が抽象化されて得られたものではないからである。

前掲の「フィルター」の例との対比でもう少し詳しく説明すると、次のようになる:

- (26) a. [フィルター\*] abstraction-of [フィルター]  
b. [ペイジアン・フィルター] instance-of [フィルター\*]
- (27) a. \*[弘法 (大師)\*] abstraction-of [弘法 (大師)]  
b. [弘法 (大師)] instance-of [弘法 (大師)\*]
- (28) a. \* $R$  abstraction-of [弘法 (大師)]  
b. [弘法 (大師)] instance-of  $R$

「フィルター」の例では、「フィルター」の語義の抽象化 (word sense abstraction) によって [フィルター\*] のような潜伏性の概念が導入されている。その上、これらの例で「フィルター」という語が実際に言及しているの [フィルター\*] である。この場合、代表例効果はない。これに対し、「弘法 (大師)」については [弘法 (大師)\*] と名づけるような潜伏性の抽象概念が存在しているわけではない。[弘法 (大師)\*] の代わりに存在するのは、(28) が示すように、潜伏性の役割  $R$  であり、「弘法 (大師)」はその代表事例である。

4.3.4 「隠喩」という語の意味拡張

本研究では、あれこれの文彩をひっくるめて「隠喩」と呼ぶ CMT とは異なり、隠喩を文彩から区別する。そうするのは、次の理由から、それが好ましいからである。

- (29) a. 隠喩は文彩の代表例であることから、文彩全体に対して代表効果をもつ。  
b. この代表例効果を利用して、「隠喩」という語は、厳密には隠喩ではないものを指すのにも使われる傾向にある。

CMT が隠喩と呼ぶのは、((24b) という) 広義の隠喩であり、これは実は (29) に規定される意味で「隠喩」という語の意味拡張だという点には注意が必要である。この理由があるため、CMT 内部での隠喩の議論 — 特に隠喩と非隠喩との区別 — は非常に混乱している。実際、CMT はズレの起こる原因と結果を混同している可能性が高い。

4.3.5 「合図」と「ハイフン」

「合図」には直喩の例が 1 例、狭義の隠喩の例が 9 例、広義の隠喩の例が 29 例が存在した。「ハイフン」には直喩の例は 0 例、狭義の隠喩の例が 0 例、換喩による広義の隠喩の例が 1 例が存在した。

「合図」は「フィルター」の場合に較べると、ずっと判断が容易であった。この違いはおそらく、「合図」は本当に機能名であるが、「フィルター」はまだそれにはなり切っておらず、それ故に判断が難しくなっていることに起因するのだろう。

4.3.6 機能名 ≠ 役割名: 意味役割名の下位分類

「番犬」や「墓場」などに対する「フィルター」の挙動を見ていると、[32, 30, 31] が役割名として一律に使ってきた名詞類に関して、次の可能性が示唆される:

- (30) 何らかの機能  $F$  自体を指す名詞と機能  $F$  を実現するモノ (の集合) を指す名詞とに区別し、下位分類が可能である。

具体的には「番犬」「害虫」「観葉植物」「抜け穴」はおおの「犬」「虫」「植物」「穴」という帰属カテゴリーが明示されている。これに対し、「フィルター」「照明」「合図」は帰属カテゴリーの明示がなく、抽象的な機能の名称になっている。

両者の挙動は同じではない。少なくとも前者はサ変名詞化しやすいという違いがある。また、「番犬」「害虫」等が機能を実現するモノを指していることにより、意味のズレを伴って使用されているかどうか判断しやすい (つまり、本来の帰属カテゴリーと異なるモノを指しているかどうかを判断しやすい) と考えられる。それに対して「合図」「フィルター」等が機能自体を指している名詞では、そもそも本来の帰属カテゴリーがはっきりしないため、意味のズレがあるかどうか判然としなかったり、意味のズレが感じられなかったりするという結果を生むと考えられる。例えば、意味のズレの判断の難しさは、「フィルター」の分析に見られるような隠喩性の判断の段階性に現れている。

- (31) 比喩性の源泉を本来の意味からのズレと捉えても、「本来の意味」が何によって定義されているかが語によって異なるため、比喩性の生じ方は語によって異なる。

4.4 隠喩と直喩: 比喩指標をどのように定義するか

4.4.1 意味のズレを明示するための引用符の使用

本来の意味からズレた意味で使われていることはしばしば引用符によって明示される。これは名詞のタイプに拠らない。

- (32) a. それまで支配階級の 番犬 といわれていた軍が合流する。  
 b. イデオロギー的・人種的・社会的理由から「国民の害虫」とされたあらゆる人々[...]の排除  
 c. 私たちは国境の手前にある「戦車の墓場」に向かっていた。

多くの例は引用との連続性を示しているとは言え、単なる引用とは言い切れないもので本来の語義からのズレを明示する指標として使われている可能性が高い。

#### 4.4.2 比喻指標の多様性

また、比喻であることを示してはいるが、「～ように」や「～みたい」のほどはそのことがハッキリしない—あるいは、比喻指標として扱うべきかどうか議論されてきていない—語句が多数あることがコーパス分析から分かった。上で述べてきた「～状」や「～と似た」などはその例である。その中でも「～として」は、特に役割名と共起することの多い表現であり、比喻指標と見なすべきかどうか問題を残している。最終的には判断を保留したが、その理由は次の二点である。

まず、「～のように」などに比べ「～として」の用法はよく分かっていない。このため、〈役割標識〉の場合と〈見なし〉や直喩の標識となっている場合の区別 (e.g., (33)) が難しい:

- (33) a. 大人として扱う。  
 b. 大人として振る舞う。  
 c. 大人として責任を果たす。

(33a) では、「大人」として扱われているのは、おそらく本来は「大人」ではないことが読みとれ、一種の「見なし」の作用が感じられる。それに対して、(33c) で「大人」として振る舞っているのは本当の「大人」であると読みとれ、「見なし」ではなく役割標識と考えられる。(33b) では、そのどちらかは判然としない。

二つ目は、概念上の〈見なし〉と、社会・制度上の〈見なし〉の区別が難しいということである:

- (34) a. そのレストランで、その子は(まるで)大人のように見えた。  
 b. そのレストランは、その子を大人としてもてなした。

両者には「本来は X でないものを X として V する」という特徴は共通しているが、直観的には比喻性に関しては若干の違いがあるように思われる。前者には概念上の「見なし」があり弱い比喩らしさを感じるが、後者にはほとんど感じられない。

#### 4.4.3 直喩の定義

すでに触れたように、実際のデータを見る限り、「～として」が比喻指標でありそれを伴う文を直喩として扱うべきなのか、比喻指標ではないし隠喩として扱うべきなのかは決めかねる。最終的な判断は保留したいが、次の可能性は十分に検討に値すると思われる:

- (35) 直喩の定義を拡張し、ではなく「元の語の意味からのズレが何らかの標識=マーカー (e.g., 「～のよう(だ、な、に)」「～みたい(だ、な、に)」「～の如し」)によって明示されている

表現」とするなら、元の意味からのズレが感じられる場合の「～として」「～となる」の一部も直喩扱いして良い。

もちろん、「～として」や「～となる」は「～のよう(だ、な、に)」や「～みたい(だ、な、に)」に較べて多義的であるから、これらほど直喩指標としての効率は良くない。だが、「～のよう(だ、な、に)」や「～みたい(だ、な、に)」も多義的であることには変わりはない。二つのクラスの違いは、多義性の程度の違いである。

#### 4.4.4 直喩と隠喩の関係

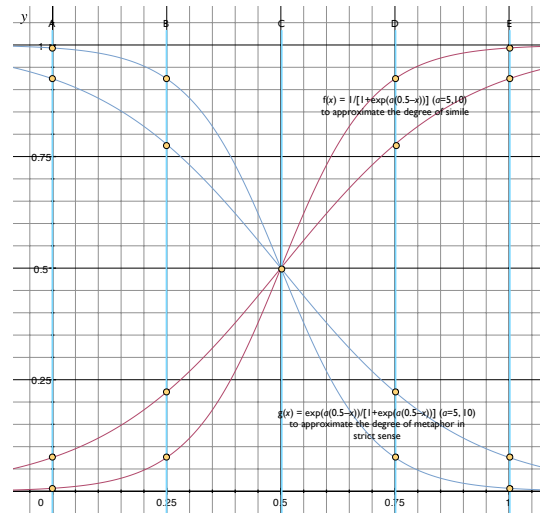


図1  $f(x) = \frac{1}{1 + e^{a(0.5-x)}}$ ,  $g(x) = \frac{e^{a(0.5-x)}}{1 + e^{a(0.5-x)}}$  ( $a=5, 10$ ): A-B 域では隠喩性が直喩性に勝り, D-E 域では直喩性が隠喩性に勝る. C では直喩性と隠喩性が拮抗し, どちらかと判定するのは不可能.

ここで想定した「意味のズレの標識(づけ)」という概念を突き詰めてゆくと、次の結論は避けがたい:

- (36) a. 意味のズレの標識づけは、(i) 語彙的に特定可能な場合と (ii) そうでない場合に大別でき、前者が広い意味での直喩に、後者が広い意味での隠喩に相当する。  
 b. もっとも純粋な隠喩はその場その場の生起文脈 (= 超語彙的単位) が標識に相当する

隠喩 = 語彙的標識が存在しない場合、語の意味が文脈中のどの要素に対して選択制限違反を起こしているのか—言い換えれば、共合性はなぜ必要なのか—が特定しやすく、意味変容を自覚しやすい。それに対して、「Xとして」や「Xとなる」は X としてかなりの範囲の名詞を取れる。ラ格、ガ格とも共起できるので、選択制限違反は緩和される傾向にある。これは例えば次のような差として現われる:

- (37) a. 奴ら<sub>i</sub> は犯罪者<sub>j</sub> だ。害虫<sub>i,j</sub> を駆除しなければ。  
 b. 奴ら<sub>i</sub> は犯罪者<sub>j</sub> だ。(奴ら<sub>i</sub> を) 害虫<sub>i</sub> として駆除しなければ。

隠喩と直喩の境界は明瞭でないというのは、事実によって示唆されるばかりでなく、ヒトの言語処理のモデルから見ると望



ましい帰結だろう。両方が質的に異なる処理を受けると考えると、直喩処理プロセスと隠喩処理プロセスという非現実的な区別をモデルに持ち込まなければならない。

ただ、注意して置くべきなのは、両者は連続的であるが、それは両者を区別することに意味がないことにはならない、ということである。両者の関係は図1に簡単に示すことができる。図の縦軸は、ある表現が隠喩あるいは直喩である程度を、横軸は語彙的要素によりその表現が比喩、つまり「喩え」あるいは「見なし」であることが明示されている程度を示す。つまり、語彙による比喩指標の明示性の関数として、直喩あるいは隠喩性の程度をシグモイド関数（より正確にはロジスティック関数）として表現している。

この図に従って考えれば、(3)や(6a)のような例は語彙的には比喩であることを示すものではなく、図の左端—つまり、隠喩性が高く直喩性はほとんどない表現であると考えられる。逆に、(4)や(8b)は、語彙的要素（「～のような(役割を持つ)」「～がわりに」）により喩えや見なしであることがある程度明示的に示されており、図中の右側に位置する、隠喩性よりも直喩性の高い表現と言える。

このように考えることの利点は幾つかあるが、そのうちの一つは引用符の扱いである。本来の意味からずれた意味で使われていることを明示するために引用符が使用されることは§4.4.1で指摘した通りだが、この定義に基づけば、これは単なる隠喩ではなく、直喩に近い隠喩となる。

ただし、この図を元にした議論を突き詰めるためには、直喩あるいは隠喩のどちらかとして認定すべき表現の全体（つまり、この2つの $x$ の変域）を考えなければならない。本研究では、とりあえず狭義の比喩の認定基準(24c)を置いてはいるが、直喩の場合必ずしも、喩えに用いられている語の語彙的意味の抽象化が生じているとは言い難い部分もある。この点は重要だが、本研究では解決できておらず、今後の検討課題として残される。

#### 4.4.5 直喩と隠喩の連続性

こうすると次の(38)が帰結するが、これは実状に合っているとと思われる:

(38) 隠喩と直喩の区別は連続的で、境界は明瞭ではない。

ここで強調して置きたいのは、(38)の意味するところは(39b)と見かけは同じ主張であるが、実際には内容が異なる、という点である。(36a)は直喩と程度の隠喩の差が何の差であるかを明確に規定しているが、CMTでの説明は単に比喩の「定義」に拠るものである。別の言い方をすれば「直喩と隠喩は意味があまり変わらないから」ということを理由に「前者は後者の特殊な場合にすぎない」と天下りに定義したのと変わらない。そのような非明示性は言語学者が望むものではない。

### 4.5 認知言語学の隠喩の理論の評価

#### 4.5.1 概念写像理論の評価

認知言語学では隠喩の説明理論として Lakoff と Johnson [15, 20, 21, 22, 23, 24] が創始した CMT の影響力が支配的である。これは興味深い一般化をもたらしたが、不備がないわけではない。難点には、少なくとも次の点が挙げられる:

- (39) a. 比喩の操作的定義の欠落: CMT は比喩の理論的定義のみを与え、操作的定義を与えていない。具体的には、CMT は隠喩を「異なる領域間の対応づけ」だと定義するが、異なる領域間の対応づけがあることを認定するための基準が、明確に、非循環的に<sup>8</sup>述べられていない(か、自明なものだとして扱われている)。
- b. 比喩の概念の過度の一般化: 逆に、表現  $E$  に異なる領域間の対応づけが認められるなら、CMT では  $E$  はどれも隠喩なので、隠喩と直喩の区別はない(実際、これが過度の一般化でないという保証はどこにもない)。

これらの問題があるため、CMT では次の(40)の認定課題に使えるかどうか怪しい:

- (40) 比喩表現の認定作業: 実際の文章に使われている数多くの表現群  $E_1, E_2, \dots, E_n$  から、隠喩表現のみを抽出する(つまり、隠喩表現の候補を全部列挙する(だけでなく、非隠喩表現(= 隠喩表現の負例)をまったく列挙しない)<sup>9</sup>)

より明示的に言えば、CMT に基づいて、普通の文章で使われている任意の語句(e.g., 名詞句、動詞句<sup>10</sup>)について、それが隠喩として使われているか否かを CMT に基づいて判断することができるだろうか?ということである。これができないならば、CMT が、論文に挙がっているような作例群をどんなにうまく「説明」できたとしても、その説明は論点先取である可能性は排除できない(「自説にとって都合の良い例だけ説明しているのではない」という懸念を晴らす事ができないから)。そうであるなら、CMT は隠喩の説明理論としては明らかに不完全である。

#### 4.5.2 概念ブレンド理論の評価

私たちは今までの結果から判断して、CMT では(40)が果たされないという結果を得たと考える。これは概念ブレンド理論(CBT) [3, 4]でも同様である。CBTでも、どんな表現に比喩性があるかを、分析に先立って言う事はできない。CBTが与えるのは、ある表現  $E$  が(修辭的)効果  $R$  をもつとわかっている時の、 $R$  の内容のそれなりに詳しい記述である。従って、どんな場合にどんな修辭的效果が生じるかを、その効果  $R$  を見る前に予測することはできていない(し、今のままでは、おそらく原理的にできないだろう)。この意味で CBT の説明は原理的に後知恵である。

以下では、単に認知言語学的にはなく、認知科学的に妥当な隠喩の理論に何が求められるかを考察してみたい。

#### 4.6 本来の意味からのズレの検知可能性

特定の文脈  $E$  にある表現  $x/E$  の意味  $M(x/E)$  が、 $E$  の本来の意味  $M(x)$  からズレていることが文彩の検知の前提である。従って、

- (41) 表現  $x$  に幾つかの異なる領域の概念が対応づけられて始めてズレが生じ、それが何らの仕方でも検知されるのではなく、何らかの仕組みで検知された  $M(x/E)$  の「本来の意味」 $M(x)$  からのズレが「異なる領域間の対応づけとして処理される」だけである。



	s	***	この床**	を**	見おろし**	たって**	、**	彼女**	が**	敷石**	の**	なか**	に**	現われ**	ている**	の**	を**	見**
*	p1	**			V	T												
この床	p2	SUBJ	この床*	P	V	T												
を	p3	SUBJ	OBJ	を*	V	T												
見おろし	p4	SUBJ	OBJ	P: を	見おろし*	T												
たって	p5	SUBJ			V	たって*												
、	p6	SUBJ			V1	T1	、*											V
彼女	p7							彼女の顔 かたち*	P					V	T			
が	p8							SUBJ	が*					V	T			
敷石	p9									敷石*	P	X						
の	p10									OBJ	の*	SUBJ						
なか	p11									MOD[1,2]	MOD[2,2]	なか*	P	V	T			
に	p12							SUBJ	P: が	LOC[1,3]	LOC[2,3]	LOC[3,3]	に*	V	T			
現われ	p13							SUBJ	P: が	LOC[1,3]	LOC[2,3]	LOC[3,3]	P: を	現われ*	T			
ている	p14							SUBJ	P: が					V	ている*			
の	p15							SUBJ	P: が					V	T	の*		
を	p16	SUBJ	P: が					OBJ[1,n]	OBJ[2,n]	OBJ[3,n]	OBJ[4,n]	OBJ[5,n]	OBJ[6,n]	OBJ[7,n]	OBJ[8,n]	OBJ[9,n]	を*	V
見	p17	SUBJ	P: が					OBJ[1,n]	OBJ[2,n]	OBJ[3,n]	OBJ[4,n]	OBJ[5,n]	OBJ[6,n]	OBJ[7,n]	OBJ[8,n]	OBJ[9,n]	P: を	見*

図2 (14)のPMA(部分)

ここで言う「本来の意味」は厳密な意味で字義通りの意味でなくても良い。それは元々の字義通りに取って代わって定着した比喩の意味=死喩の意味でも良い。実際、語源の意味の失われている多くの語句では、死喩の意味が実質的に文字通りの意味に変化している。

いずれにせよ、文彩の検出が可能であるための条件は(42)である:

- (42) 任意の表現  $x$  について、それが非比喩的に意味する概念(の領域)  $C$  が何であるかに関して、十分に網羅的で正確な記述  $D$  がある。

(14)の多層的な文彩の効果に関して言えば、 $D$ の一部をなすのは図2のPattern Matching Analysis (PMA) [16, 17]の部分パターン組み合わせ {p7, p8, p10, p11, p12, p13}, すなわち「SUBJがLOCに現われ(る)」がLOCに〈光景〉の概念が結びつき、部分パターンの組み合わせ {p1, p7, p8, p10, p11, p12, p14, p15, p16, p17}, すなわち「SUBJ(が)OBJがOBJ2の中にVしているのを見(る)」のOBJ2に〈写真〉や〈絵〉の概念と結びついている(特にV=「写る」のとき)という情報である。文彩の後知恵でなく、自己成就的でない説明には、コロケーションを含めた超語彙的な単位 (superlexical units) に関して、このような記述を充実させてゆくことが不可欠であるが、Berkeley FrameNet [2, 12]のような興味深いプロジェクトが進行中とは言え、現状では著しく未熟な段階である。内容は未知数だが、池原ら [26, 27]の非線型表現の (nonlinear expressions) データベースには期待できるかも知れない。

## 5 終わりに

表1に示されるように、名詞に関して言うと比喩はそれほど多頻度ではない。「襲う」「逃れる」「逃げる」のフレーム意味論ベースの用例分析 [33, 28, 29] で、使用例の半数近くが比喩だったことを考えると、この結果は意外とも言える<sup>11</sup>。これが示唆することは幾つかあるが、その内の一つは、(43)である:

- (43) 比喩研究者 (e.g., CMT 論者) が比喩を研究する理由としてその遍在性を挙げるのは、少なくとも名詞の挙動に関しては、事実に合っていない。

これが事実だとすると、次のことが比喩研究の重要な課題となる:

- (44) 動詞(あるいは形容(動)詞)と名詞とでは比喩的用法の比率がこれほど違うのはなぜだろうか?

これは「意味役割を定義するのは実質的に動詞である」[34]と「多くの意味役割には固有の名称がない」[18]の見解を組み合わせれば理解可能な結果とは言えるが、意味情報源として理想認知モデル ICM を想定するだけの比喩理解の理論から簡単に予測できる結果ではない。

黒田ら [34]の規定を受け入れても謎は残る。ヒトが概念を使用する単位が状況ベース、従って意味役割ベースなのだとしたら、なぜ動詞類に比べて名詞類の比喩の用例数が圧倒的に少ないのか? 状況や意味役割の現実的なレベルでの区別は、語の組み合わせでカバーされているわけだが、その実態がわからない限り、なぜ問題の違いが起こったのかをしっかりと説明するのは難しい。これが語を越えた超語彙単位の意味記述が文理理解の研究の基礎データとして不可欠な理由である<sup>12</sup>。

## Notes

<sup>1</sup>この理由は明らかに、従来の研究が作例中心だからである。

<sup>2</sup>後述のように直喩と隠喩の区別には本質的に曖昧な部分もあり、それが「〜状」のような要素の取り扱いの難しさに現れている。

<sup>3</sup>「〜に似た」という表現をふくむ文を直喩とすることは議論の分かれるところであろう。しかし、比喩を類似部分をだけを取り出した「たとえ」や「見なし」の表現であると考えれば、「〜に似ている」は「〜のようだ」はほぼ同じ意味を持つことになるため、比喩指標の一種になると考えられる。

<sup>4</sup>「ポリエステルのような」は三例あったが、どれも例示と類比的用法だった。

<sup>5</sup>これは生成辞書理論 [25]では共合成として、概念ブレンド理論 [3, 4]ではブレンドとして、とりあえず「説明」できる効果かも知れないが、その説明の内実がどれほどのものかは疑問が残る。

<sup>6</sup>そうしないのは、単にそうする必然性がないからである。

<sup>7</sup>より一般的に言えば、Lakoff [21]の「一般性は特殊性である」の隠喩は(24c)の意味での狭義の隠喩ではない。

<sup>8</sup>「非循環的に」というのは、異なる領域間の対応づけの有無を、比喩性の有無によって認定するのであれば、それは循環論になり、CMTの「説明」は反証不能になるからである。

<sup>9</sup>犯罪者の逮捕の効率を考えれば、この点がわかりやすいだろう。ある犯罪事件の犯人  $p_1, p_2, \dots, p_n$  を逮捕するのに、怪しい人物を手当たり次第に逮捕すれば、逮捕者  $N$  人中に  $n$  人の犯人が全員含まれる可能性 (=被覆率  $c = \frac{n-m}{n}$  ( $m$  は逮捕されなかった犯人の数) は最大になるが、その代わりに、逮捕者の数  $N$  に対する犯人の数  $n$  の比率 (=判断の精度  $p = \frac{n}{N}$ ) は極端に小さくなる。理

想は  $c = p = 1.0$  である。つまり、何かを予測するために該当条件を有効範囲を超えて一般化する(つまり過剰一般化する)のは、 $N$  を徒に大きくするだけで、実質的に「当てずっぽう」を言っているのと変わらない。

<sup>10</sup>認知言語学は(生成言語学と違って)名詞句や動詞句のような単位は認めないと主張し、これに基づいてその必要を否定することには、何の効用もない。「名詞句」とか「動詞句」のような名称はどうでもよいのである。理論  $T$  を受け入れない研究者が  $T$  の仮説に依存する名称  $N_1, \dots, N_n$  を拒絶によって、 $N_1, \dots, N_n$  と呼ばれている単位が実在しないことを暗に主張する真剣さに欠けた行ないである。

<sup>11</sup>理由としては、理論的にはもちろん、サンプリングが偏っている可能性も否定できないが、それはありそうなことではない。

<sup>12</sup>特定のタイプの文彩と文法上の出現位置との相関が存在するなら、生起位置を分類することで問題解明の糸口が得られる可能性がある。

## 参考文献

- [1] J. A. Asmuth and D. Gentner. Context sensitivity of relational nouns. In *Proceedings of the 27th Annual Meeting of the Cognitive Science Society*, pp. 163–168, 2005.
- [2] C. F. Baker, C. J. Fillmore, and J. B. Lowe. The Berkeley FrameNet Project. In *COLING-ACL 98, Montreal, Canada*, pp. 86–90. Association for the Computational Linguistics, 1998.
- [3] G. R. Fauconnier. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge, MA: Cambridge University Press, 1997.
- [4] G. R. Fauconnier and M. Turner. Conceptual integration networks. *Cognitive Science*, Vol. 22, pp. 133–187, 1998.
- [5] C. J. Fillmore. Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di Semantica*, Vol. 6, No. 2, pp. 222–254, 1985.
- [6] C. J. Fillmore. U-semantics, second round. *Quaderni di Semantica*, Vol. 7, No. 1, pp. 49–58, 1986.
- [7] C. J. Fillmore. *Form and Meaning in Language, Vol. 1: Papers on Semantic Roles*. CSLI Publications, 2003.
- [8] C. J. Fillmore and B. T. S. Atkins. Towards a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors. In A. Lehrer and E. F. Kittay, editors, *Frames, Fields and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*, pp. 75–102. Lawrence Erlbaum Associates, 1992.
- [9] C. J. Fillmore and B. T. S. Atkins. Starting where the dictionaries stop: The challenge for computational lexicography. In B. T. S. Atkins and A. Zampoli, editors, *Computational Approaches to the Lexicon*, pp. 349–393. Clarendon Press, Oxford, UK, 1994.
- [10] C. J. Fillmore and B. T. S. Atkins. FrameNet and lexicographic relevance. In *The First International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC)*, 1998.
- [11] C. J. Fillmore and C. F. Baker. Frame Semantics for text understanding. In *Proceedings of WordNet and Other Lexical Resources Workshop, NAACL, Pittsburgh*. 2001.
- [12] C. J. Fillmore, C. R. Johnson, and M. R. L. Petruck. Background to FrameNet. *International Journal of Lexicography*, Vol. 16, No. 3, pp. 235–250, 2003.
- [13] D. Gentner and K. J. Kurtz. Relational categories. In W. K. Ahn, R. L. Goldstone, B. C. Love, A. B. Markman, and P. W. Wolff, editors, *Categorization Inside and Outside the Laboratory*, pp. 151–175. APA, 2005.
- [14] J. Grady. THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics*, Vol. 8, No. 4, pp. 267–290, 1997.
- [15] M. Johnson. *Body in the Mind*. University of Chicago Press, 1987.
- [16] K. Kuroda. *Foundations of PATTERN MATCHING ANALYSIS: A New Method Proposed for the Cognitively Realistic Description of Natural Language Syntax*, Unpublished Ph.D. thesis, Kyoto University, 2000.
- [17] K. Kuroda. Presenting the PATTERN MATCHING ANALYSIS, A framework proposed for the realistic description of natural language syntax. *Journal of English Linguistic Society*, 17, pp. 71–80, 2001.
- [18] K. Kuroda, K. Nakamoto, and H. Isahara. Remarks on relational nouns and relational categories. In *Conference Handbook of the 23rd Annual Meeting of Japanese Cognitive Science Society*, pp. 54–59. JCSS, 2006. [Presentation D-3].
- [19] K. J. Kurtz and D. Gentner. Kinds of kinds: Sources of category coherence. In *Proceedings of the 23rd Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp. 522–527, 2001.
- [20] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』(池上 嘉彦・河上 誓作 訳). 紀伊国屋書店.].
- [21] G. Lakoff. The invariance hypothesis: Is the abstract reasoning based on image schemas? *Cognitive Linguistics*, Vol. 1, No. 1, pp. 39–74, 1991. [邦訳: 不変性仮説: 抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか? (杉本孝司訳). In 坂原 茂 (編), 『認知言語学』の発展』, 1–59. 東京: ひつじ書房.].
- [22] G. Lakoff. Contemporary theory of metaphor. In A. Orthony, editor, *Metaphor and Thought*, pp. 202–251. Cambridge University Press, 2nd edition, 1993.
- [23] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』(渡部昇一ほか 訳). 大修館.].
- [24] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.
- [25] J. Pustejovsky. *The Generative Lexicon*. MIT Press, 1995.
- [26] 池原 悟, 徳久 雅人, 村上 仁一, 佐良木 昌, 池田 尚志, 宮崎 正弘. 非線形な重文複文の表現に対する文型パターン辞書の開発. 情報処理学会研究報告 2005-NL-170, pp. 157–164, 2005.
- [27] 池原 悟, 阿部 さつき, 竹内 奈央, 徳久 雅人, 村上 仁一. 意味的等価変換方式のための重文複文の統語的意味的分類体系について. 情報処理学会研究報告 2006-NL-176, pp. 1–8, 2006.
- [28] 中本 敬子, 黒田 航. 「 $y$  が  $x$  から逃げる」の理解内容の階層的意味フレーム分析: コーパスの人手解析と心理実験を通して. 日本認知言語学会発表論文集第 6 巻, pp. 390–400, 2006.
- [29] 中本 敬子, 黒田 航. 「逃れる」の階層的意味フレーム分析とその意義: 「言語学・心理学からの理論的, 実証的裏づけ」のある言語資源開発の可能性. 言語処理学会第 12 回大会発表論文集, pp. 592–595, 2006.
- [30] 中本 敬子, 黒田 航, 梶見 孝. 喩辞名詞の意味特性が隠喩形式選好に与える影響: 意味役割理論に基づく役割名と対象名の区別から. 日本認知科学会第 23 回大会発表論文集, pp. 390–395, 2006.
- [31] 中本 敬子, 金丸 敏幸, 黒田 航. 意味役割理論から見た名詞の種別と隠喩的使用との関係. 第 7 回日本認知言語学会大会ハンドブック, pp. 108–111. JCLA, 2006.
- [32] 黒田 航, 井佐原 均. 意味役割名と意味型名の区別による新しい概念分類の可能性: 意味役割の一般理論はシソーラスを救う? 信学技報, Vol. 105, No. 204, pp. 47–54, 2005.
- [33] 黒田 航, 中本 敬子, 野澤 元. 状況理解の単位としての意味フレームの実在性に関する研究. 日本認知科学会 第 21 回大会発表論文集, pp. 190–191, 2004.
- [34] 黒田 航, 中本 敬子, 野澤 元. 意味フレームに基づく概念分析の理論と実践. 山梨正明 (他) (編), 認知言語学論考第 4 巻, pp. 133–269. ひつじ書房, 2005.
- [35] 金丸 敏幸, 村田 真樹, 黒田 航, 井佐原 均. 対訳コーパスを利用した Berkeley FrameBet からの日本語 lexical units の半自動的発見手法. 日本語用論学会発表論文集第 7 巻, pp. 182–192, 2006.